

障害を持つ児童およびその保護者の就学に関する調査Ⅵ

石 岡 由 紀
堤 庄 祐
安 藤 忠

問題と目的

前回まで「障害を持つ幼児およびその保護者の就園希望に関する調査Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ¹⁾²⁾³⁾」「障害を持つ幼児およびその保護者の就園・就学に関する調査Ⅳ⁴⁾」「障害を持つ幼児・児童およびその保護者の就学に関する調査Ⅴ⁵⁾」を実施してきた。その結果、保護者の就園希望先はほとんど地域の幼稚園や保育所であった。また就学の希望先は、普通学級、特殊学級の違いはみられたが、ほとんどが地域の公立小学校への就学を希望していた。

その希望理由としては「居住地域に近い」「地域の子どもが数多く在籍している」というものであり「就園希望」「就学希望」ともに差はみられなかった。

「就園希望」についての調査から、障害を持つ幼児が障害を持たない幼児と同じ保育環境で保育を受けるといふ、いわゆる「統合保育」の理念が順調に進められており、保護者の希望が受けとめられているという結果を得た。また前回の「就学希望」についての調査からも、対象児童の92%以上が地域の公立小学校普通学級・特殊学級に就学及び在籍しており、保護者のほぼ希望通りの就学先となっている。学校教育においても「統合教育」が当たり前になりつつあるといえる。

しかしながら、前回の調査対象児の中に普通学級から特殊学級への在籍変更が3ケース、特殊学級から養護学校への在籍変更が2ケースあった。就学後1～2年の間に在籍クラスまたは学校を変更する理由がいかなるものであったか、

明らかにすることはできなかった。これらのケースは、就学希望は満たされたものの、就学した後の子どもの受け入れ、保護者の要望や期待などが満たされなかった結果とも考えられ、教育の「質」についての現状を示唆しているのではないかと考えられる。

こうした「質」についての問題は、就園希望が減少傾向にあり、また在籍期間が短くなっている障害幼児通園施設の役割や機能、就園希望が増加傾向にある統合保育の役割や機能とも関連させながら、今後の課題として検討する必要がある。

こうした過去の調査・研究をふまえ、本調査では障害の原因、年齢、在籍する学校や学級が異なる6名の児童とその保護者に対して、アンケートおよび面接により就学の実態について調査を実施した。

調査の目的は、就学の状況を聴き取り、学校側の受け入れの状況、保護者のニーズなどを明らかにし、今後の統合教育のあり方について検討・考察を加えることである。

方法

1. 調査対象

調査対象は、かつて神戸市総合児童センターにおける母子教室で発達療育相談を受けた経緯のある児童およびその保護者であり、現在小学校1年生から4年生に在籍しているダウン症児（1年女児1名）、自閉症児（1年男児1名・4年女児1名）、知的障害児（2年女児1名）、高機能自閉症児（1年男児1名・4年男児1名）の計6組である。調査は児童および保護者を対象としているが、回答は必然的に保護者によるものである。

2. 手続きおよび質問内容

調査は2002年9月から11月にかけて幼児およびその保護者に対して行った。調査は面接法および質問紙法を採用した。その内容は概ね次の7点に大別される。①障害の原因について②就学までの保育過程について③現在の就学先について④就学先を決定した理由について⑤在籍校およびクラスの状況⑥在籍校お

よびクラスに要望すること⑦今後のこと・その他を記述および口頭での回答とともに求めるものである。

結果

1. 対象児の状況

	A子・1年	B男・1年	C子・4年	D子・2年	E男・1年	F男・4年
障害の種類	ダウン症	自閉症	自閉症	知的障害	高機能自閉症	高機能自閉症
保育過程	私立保育園	通園施設 私立幼稚園	通園施設 私立保育園	通園施設	通園施設 市立幼稚園	通園施設 市立幼稚園
在籍の実態	普通学級	特殊学級	養護学校	特殊学級	普通学級	普通学級

1) A子（1年生）

- ① 障害の原因／ダウン症
- ② 就学までの保育過程／両親の就労にともない1歳で私立保育園に就園、就学まで同保育園に在籍する
- ③ 現在の就学先／神戸市立G小学校普通学級
- ④ 就学先決定の理由／障害の程度が比較的軽度であり、保育園でも特に大きな支障もなく就学をむかえた。そこで低学年の間は他の児童と同じ環境の中で教育を受けることを希望したし、必要であると感じた。また両親の思いとして学校や地域の人々に「ダウン症のA子ちゃん」ではなく、「1年生のA子ちゃん」という対応をしてほしいという希望があった。
- ⑤ クラスの状況／児童21名（1年生23名のうち2名が特殊学級在籍児）であるが、特殊学級在籍児との交流時間は特殊学級担任がA子に対する援助をするなど流動的に担任以外の教員が本児とのかかわりに協力している。
- ⑥ 学校やクラスに対する要望／家から学校まで距離があることと、A子自身の歩行速度の問題もあり登校に時間がかかる。その上学校近くの歩道橋では階段の昇降でより本児の歩行が遅れるため、集団登校児童に迷

惑をかけることがある。学校による登校指導があればそれによる他児童への負担が軽減し、トラブルが解除されるものと考えている。また本児の学校での様子がわかりにくいため、必要に応じて学校との連絡（学校訪問）をとっているが、連絡帳や学級通信などの発行があればと希望している。

- ⑦ 今後のこと／今までは同年齢の子どもと大きな差異もなく保育や学習過程を経験してきたが、学習内容が高度になるにつれて、本児の負担が増加していることがわかる。今後は本人の様子を見て、特殊学級への変更も検討している。ただ特殊学級への変更後は、本児に応じた学習内容を適切に提示するなど普通学級では困難であると思われる対応を期待している。また同学年や他学年児童との交流を通して本児に対する偏見を持たれることがないような指導は随時行ってほしい。

2) B男（1年生）

- ① 障害の原因／自閉症
- ② 就学までの保育過程／神戸市立知的障害児通園施設に1年6ヶ月在籍後、私立幼稚園に2年在籍し、就学まで同幼稚園に在籍する。
- ③ 現在の就学先／神戸市立H小学校特殊学級
- ④ 就学先決定の理由／本児の様子から普通学級での学習内容は理解困難なものであり、本児のメリットになることはないと思った。養護学校も見学したがそこでは本児に対する刺激が少ないという印象を持った。また姉妹が通う小学校には通学させたいという希望があったこと、また幼稚園で培った本児に対する理解を地域の人々に継続してもらうためには地域の学校に在籍することが必要だと考えた。
- ⑤ クラスの状況／特殊学級は児童3名に対し担任1名・交流クラスは児童21名在籍（2クラス）である。特殊学級には障害の種類や特性の違う児童が3名在籍しているため、担任教員はそのクラス経営に困難さを抱いているという印象を保護者は持っている。特殊学級担任・交流学級担任ともに本児に対する理解を示しているが、登校時の受け入れや下校時

間の伝達の不行き届きなど、特殊学級と交流学級との連携がとれていないのではないかと思えることが度々ある。

- ⑥ 学校やクラスに対する要望／学校全体における連携をとってほしい。また特殊学級担任に対してはもう少し専門性を高め、本児の特性に応じた学習課題を提供してほしい。姉妹が同時に在籍する期間が長いので、彼女たちに対する配慮をしてほしい。そのためには総合的な学習の時間などを通して福祉教育を充実させてほしい。
- ⑦ 今後のこと／特殊学級に在籍しながら本児の能力に応じた教育を受けさせる一方で、本児のストレス軽減に必要な療育サポートも継続的に受けさせたい。

3) C子(4年生)

- ① 障害の原因／自閉症
- ② 就学までの保育過程／神戸市立知的障害児通園施設に1年在籍後、私立保育園に2年在籍し、就学まで同保育園に在籍する。
- ③ 現在の就学先／神戸市立I養護学校
- ④ 就学先決定の理由／保育園では必要以上の刺激があり本児に対する負担が大きすぎたという経験から普通学校での教育を受けることは困難であると感じた。また医師からも刺激の少ない環境での教育を受ける必要性を説かれ、本児には専門性の高いところで教育を受ける必要性があると感じた。養護学校見学時に経験したゆったりとした学習内容や時間の流れが本児に適していると思ったこと、またその日担当した教員に専門性の高さを感じた。
- ⑤ クラスの状況／児童数8名(3・4年生混合)に対し担任教員4名である。複数担任制のため本児の様子をよく見ているという印象がある。
- ⑥ 学校やクラスに対する要望／土曜休業開始に伴い居住地域における交流時間が少なくなった。またバスによる一斉下校であるため中・高学年になっても下校時間が早い。本児に無理の少ない課題や身辺自立だけで

はなく、本児の能力に応じた学習課題も取り入れて欲しい。学校は遠隔地にあるので度々訪問することが困難である。そのため学校での様子をもう少し詳細にわかるようにしてほしい。

- ⑦ 今後のこと／養護学校で本児に応じた教育を受けさせるという方針を継続する予定である。ただ余暇時間における本児へのアプローチの方法が今後の課題であると考えるが、家族だけの負担になることに対して不安が残る。

4) D子(2年生)

- ① 障害の原因／自閉をともなう知的障害
- ② 就学までの保育過程／神戸市立知的障害児通園施設に3歳で就園後就学まで同園に在籍する
- ③ 現在の就学先／神戸市立J小学校特殊学級
- ④ 就学先決定の理由／通園施設在籍時より地域の幼稚園や保育園への就園を考えていたが、本児の能力に適切だと思われる園がなく就園を断念した経過があり、特別なケアが必要な本児には普通学級進学は困難だと判断した。姉の希望もあったことや学校側の受け入れに対する対応に誠意を感じた。また地域の同年代の子どもに本児の存在を理解して欲しかった。
- ⑤ クラスの状況／児童6名に対し担任教員3名(肢体不自由児2名・知的障害児2名・情緒障害児2名)である。現在J小学校は福祉モデル校に指定されており特殊学級に養護学校から転勤してきた教員が配属されるなど専門的な配慮がなされている。また学校全体が協力体制をとっているという印象がある。
- ⑥ 学校やクラスに対する要望／今現在の状況は恵まれた教育環境であると考えられるが、来年度特殊学級に在籍している6年生が卒業すると学級数が削減されるなど今より過酷な学級運営が予想される。個々の障害に応じた教育環境の整備を充実させるためにも現在の学級数を維持させて欲しい。

⑦ 今後のこと／現在個別の対応も受けられ、養護学校より同年齢の児童からの刺激もあることから、現在の特殊学級在籍に不満はないが、本児の能力のことを考えると養護学校への転校も常に考慮に入れている。しかし今のところ決定的な判断材料が見つけれないというのが現状である。

5) E男(1年生)

① 障害の原因／高機能自閉症

② 就学までの保育過程／神戸市立知的障害児通園施設に3歳で就園後、神戸市立幼稚園に就園し就学まで同園で2年在籍する。

③ 現在の就学先／神戸市立J小学校普通学級在籍、神戸市立K小学校情緒障害児通級指導教室に通級

④ 就学先決定の理由／通園施設在籍中は多動が目立った本児であったが、幼稚園就園頃より落ち着きが見られるようになり、他児の模倣ができるようになった。同幼稚園では年少時に加配による教員が配置された。年長時には学級担任は一人であったが園児数が1クラス19名であったことや、担任教員、主任、養護教員の連携がうまくとられており、安定した園生活をおくることができた。また幼稚園在籍時代に通級していた神戸市立情緒障害児通級指導教室が本児に適しており、保護者の気持ちのよりどころでもあった。特殊学級に在籍した場合は通級による指導が受けられなくなるということも普通学級在籍を選択した理由の一つである。

⑤ クラスの状況／児童数33名に対し担任1名である。2学期頃(学校側からの説明はなく配置日は不明)より、1週間に1日学生ボランティアが配置されている。学級担任の理解もあり本人は楽しく通学している。

⑥ 学校やクラスに対する要望／ボランティアの配置は本児にとってメリットのあることであり以前から要望していたことではあるが、どのくらいの頻度でどのようなかわりをしてもらっているのかという状況説明が欲しい。ボランティアが配置される頻度を増やしてほしい。通級指導教室への通級は本児にとっても保護者にとっても必要なサービスであると

考えているが、居住地から遠く通級に時間がかかる。通級後、一度学校に帰ることを考えるともう少し近くに学級を設置して欲しい。また現在通級指導教室は本児にとって息抜きの一つとなっている。今後は学習面におけるアドバイスやサポートも検討してほしい。

- ⑦ 今後のこと／学習面での遅れが顕著となったり、不適応行動が見られるようになるなど本児からのサインを見逃すことがないよう配慮している。またそれらサインが見られた場合は特殊学級への在籍変更の時期であると考えている。

6) F男(4年生)

- ① 障害の原因／高機能自閉症
- ② 就学までの保育過程／L市立通園施設に3歳で就園後、神戸市立知的障害児通園施設に転園する。神戸市立幼稚園に就園し就学まで同園で2年在籍する。
- ③ 現在の就学先／神戸市立M小学校普通学級在籍、神戸市立K小学校情緒障害児通級指導教室に通級
- ④ 就学先決定の理由／障害の有無にかかわらず普通学級に在籍することがあたりまえだと思う。本児自身も現在のクラスに在籍することを希望している。
- ⑤ クラスの状況／児童40名に対し担任1名である。現在算数の時間には筆算の課題中に限定してTT制が導入されている。
- ⑥ 学校やクラスに対する要望／障害特性への理解とそれに伴う専門性を導入してほしい。また算数の特殊課題学習期間中だけでなく、主要科目におけるTT制を導入してほしい。逆交流の実施を実現させてほしい。
- ⑦ 今後のこと／本児の様子から特殊学級への編入も考慮に入れているが、現在在籍している小学校の特殊学級の教員の人数や専門性などの問題で、F男にとって入級するメリットがあまり感じられない。また通級指導教室は本児にとっては有意義なサービスであると考えられるが、経済的・時間的には非効率だと思われる。本児の意思を尊重するためにも普通学

級に在籍し、学校以外での療育活動に参加させたいと希望しているが経済的なことも考慮すると非常に厳しい状況にある。

考察

今回の面接調査では障害の原因や年齢また在籍する学校やクラスの違う6名の児童とその保護者から現在の就学の実態を聞き取り、その問題点や今後の課題を探ることを目的とした。前回までの調査結果から、就学を検討するにあたっては就園する保育機関における保育の実態や経験がある程度のウェイトを占めていることが明らかにされた。今回の調査においても前回までの調査と同様の結果が得られている。A子は両親がともに就労しているため乳児期より保育園への就園が可能となっており、就学まで同園に在籍している。ダウン症児は超早期に障害の有無が判明することから母子教室等の療育を経て比較的早い時期に保育園就園が可能となっている。特にA子のように両親がともに就労している場合は母親の職場復帰とともに保育園への就園が当然のこととして可能となっているのである。これは神戸市の保育園が比較的早い時期から障害児保育に対する受け入れを始め、その実績を積んできた結果であると考えられる。他の5名に関しては幼児期にことばの遅れや多動等なんらかの発達遅滞がみられたことにより、通園施設への在籍という経過がみられる。しかしながらそのうちの4名はおおよそ1年後には地域の幼稚園や保育園に就園している。

これも前回の調査結果と同様に、神戸市においては保護者の希望があれば地域の保育機関に在籍するということがもはや主流になっているということのあらわれであろう。また今回の調査から幼稚園や保育園での在籍中の様子を鑑み就学先を決定する要素としていることが明らかになった。特にA子、E男は幼稚園や保育園での受け入れ体制が比較的良好で、調査対象児がそれら在籍先で大きな問題もなく保育生活を送ることができたということが地域の小学校普通学級への就学を決定する大きな材料となっている。またB男については幼稚園での経験や他児との交流関係をふまえて養護学校ではなく、地域の小学校特殊学級への就学を決定している。その一方で、C子の場合は在籍した保育園での

様子（本児にとっては同年齢の子どもの刺激が多すぎた）が保護者の望んでいた状態ではなく、本児への負担が大きかったと考えたことが養護学校への就学を決定する要因となっている。またD子の場合は地域の幼稚園や保育園では本児にとって有意義な保育を受けることは困難であると考えたという意見がきかれた。これらの結果は障害の軽重に加え受け入れ側の保育の質がその保育機関や教育機関を選択する一つの要因となっていることのあらわれであろう。

また就学前の保育機関に関して、通園施設の場合は家庭ではなかなか定着しなかった生活習慣の獲得が可能となったこと、本児のペースにあった好きな活動をすることができたこと、同じ悩みを持った保護者同士のつながりがもてるようになったことなどがそのメリットとしてとらえられている。その一方で同年齢児からの刺激が少ない、地域から離れているため公共交通機関の利用による経済的・時間的負担が大きいという意見がきかれた。

幼稚園や保育園の場合は地域に密着していて、同年齢児からの刺激があるという意見とうらはらに子どもの状態によっては同年齢児からの刺激は強すぎたり、同じ悩みを持つ保護者が少ないことから孤立感を味わうことがあるという意見がきかれた。さらに保育者の障害児保育に対する専門性が不足しており、子ども理解が不十分である。また人的配慮がなく、保育機関教職員の母親への共感が得られないなどが、地域の保育機関におけるデメリットとして聴取された。幼稚園や保育園においてこれらのデメリットが山積されているということは、障害のある子どもが地域の保育機関で保育を受けることが主流となっているという事実と、保育を提供する側の受け入れ体制が比例したものとなっておらず、未だに障害がある幼児に対する保育は自分たちの領域ではないという考えが存在しているからではないかと考えられる。就学先を決定した理由については、どの学校およびクラスを選択するにあたって、「普通学校では刺激が多すぎる」「普通学級は無理だと思った」「普通学級でやっていけると思った」等子どもの状態を考慮して判断するというケースが主流である。また低学年の間は他の児童と同じ環境のもとですごさせたい、兄弟姉妹と同じ学校に通わせたいという保護者の思いも選択要因のひとつとしてあげられている。さらには

子どもに応じた（教員の専門性、教員配置、児童数）対応がしてもらえるか否か、地域との密着の有無などの要因が考慮されている。その一方で特殊学級の不整備による要因で普通学級に在籍させるという消極的な理由もきかれた。これらの結果から就学を選択するにあたって保護者は一つの要因に固執するのではなく本人の能力の問題や保護者の思い、教育環境等様々な要因を考慮して選択していることがわかる。これは保育就園先を決定する場合と少々異なった状況にあるものと考えられる。たとえば保育機関を決定する場合には、「居住地域に近く、近所の子どもが多く在籍している」というのが大半を占める意見であった。すなわち保育機関における保育を経験する以前は障害の有無や軽重よりも「地域の子どもと同じ環境の中で保育をうけさせたい」という保護者の思いが優先されていた場合が多いのであるが、実際に保育経験を重ねることによって、本人の能力的な問題や教育環境の問題などが現実味を帯びるにしたがってその先の就学時には複数の要因が考慮されることとなるのであろう。

就学先の状況としては養護学校の場合、専門性の高い教員がいることや、教員の人数が多いことなど子どもとじっくりかかわってもらえるというのが最も大きなメリットであると考えられている。一方で子どもへの負担は少ないが生活習慣に重点がおかれすぎていて学習面への課題が少ないことや居住地域との交流がほとんどなく、地域における孤立感を味わっているなどをデメリットとして感じている。

特殊学級においては、専門性のある教員（専門性については後述する）が配属されている場合とそうでない場合の差が顕著であるようである。養護学校の場合は複数担任制をとっている場合が多いため、その問題はある程度相殺されているようであるが、特殊学級の場合は単数担任のためにその問題が顕著に現れているものと考えられる。また学校によっては交流に重点を置かれていない場合や教員間の連携がとれていない場合などもあり、養護学校ではなく地域の小学校を、また特別なニーズを必要と考え普通学級ではなく特殊学級を選択したのであるから、1クラスにおける児童数の問題だけではなく、特殊学級を選択したメリットを最大限にいかす教育環境が整備されるべきであろう。

普通学級の場合は、同年齢の子ども同士のかかわりには得るものがあるが、今後そのかかわりがどのような形になっていくのは不明であり、そのことに対する不安も感じているようである。またひとりひとりの子どもに応じた対応はしてもらえていないという印象を持っているようである。一方で通級指導教室は普通学級に在籍する児童や保護者にとってはひとつの有効なサービスであると感じられているようであり、今後はこれら通級制度の提供するサービスの内容を検討しその有効性をさらに効力のあるものとするべきであろう。

結論

今回の調査を通して明らかにされた保護者の要望としては、学校やクラスに関係なく十分な教員配置や障害の特性に応じた対応が可能な教員の専門性の高さを求めるものであった。文部科学省が明らかにした軽度発達遅滞をみせる児童の対応についての見解からボランティアの配置が可能となるなど今後物理的な配慮は進んでいくであろう⁶⁾し、必要不可欠な施策であることはいうまでもない。ただそのような物理的な配慮だけではこの問題の解決にはならないものと考えられる。面接を行った結果、その要望の仕方という点においては学校もしくは担任教員と保護者の信頼関係の有無が大きく作用しているというような印象を受けた。さらには保護者の生活状況の安定の仕方もその大きな要因の一つであるようである。すなわち保護者自身が安定した環境にある場合は子どものおかれている状況にある程度満足しており、それと比例するかたちで子どもも比較的落ち着いた学校生活を送っているようである。

障害の有無にかかわらず保護者はさまざまな問題をかかえている。その問題解決に向けて保護者の安定する環境を構成するためには保護者の立場に立った対応ができることが必要であろう。保護者からのニーズはさまざまであり、すべてのニーズを実現させていくことは現状では困難なことであろう。しかしどのあたりまではお互いに譲歩することが可能なのかという話し合いが成立する関係づくりが必要であるものと考えられる。その関係づくりを構築するにあたって必要なもののひとつは教員や保育者が保護者に対して、相手を認め共感的理

解を持つということであろうと思われる。つまりそれこそが保護者が求める教員の専門性のひとつであるものと考えられる。

障害の有無や程度によって、保育機関や教育機関を選択するのではなく、どのような子どもであってもその子どもや保護者が選択した保育機関や学校がその子どもにとって最善の利益を受けることができる環境であるという体制を整わせ、子どもや保護者のニーズに応じた保育や教育を展開していく必要性があるものと考えられる。

<註>

- 1) 堤莊祐他「障害を持つ幼児およびその保護者の就園希望に関する調査ーダウン症児の場合を中心にー」神戸親和女子大学児童教育学研究 第17号 1998年
- 2) 石岡由紀他「障害を持つ幼児およびその保護者の就園希望に関する調査Ⅱ」神戸親和女子大学児童教育学研究 第18号 1999年
- 3) 堤莊祐他「障害を持つ幼児およびその保護者の就園希望に関する調査Ⅲ」神戸親和女子大学児童教育学研究 第19号 2000年
- 4) 石岡由紀他「障害を持つ幼児およびその保護者の就園希望に関する調査Ⅳ」神戸親和女子大学児童教育学研究 第20号 2001年
- 5) 堤莊祐他「障害を持つ幼児・児童およびその保護者の就学希望に関する調査Ⅴ」神戸親和女子大学児童教育学研究 第21号 2002年
- 6) 文部科学省「特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議の報告」2001年